

近代日本版画家名覧
(1900—1945)

はじめに

版画堂主人樋口良一さんの若き日の仕事に『版画家名覧 明治末・大正・昭和』（山田書店 1985年3月）がある。

この名覧は、明治後期以降の版画家1890人を収録したもので、各作家2、3行の簡略な記述とはいえ、インターネットが今日のように発達していなかった当時においては、作家の略歴を知る上で非常に便利な冊子であり、欧米の研究者の間でもその黄色の表紙から「Yellow Book」と呼ばれ利用されていたようである。

しかしながら、その後、歳月がたち、新知見の作家や資料などが確認されるようになったことから、改訂版の出版を望む声も強くあり、私もその一人であった。

2004年夏に関西から東京の新しい職場に異動し、樋口さんともひんぱんに会う機会を得たので、前から気になっていた改訂版の話などをしていううちに、「一緒にやろうか」ということにもなったが、その時は、私自身が勤務先の美術館のオープン準備もあり、具体的には進まなかった。

2007年1月に勤務先の国立新美術館はオープンし、その運営が軌道に乗った同年秋になって、とりえず改訂のための勉強会を持とうということになり、樋口さんと私、石橋奈央さん（元国立新美術館学芸系インターン）の3人が、月1、2回の割合で私の勤務先の研究室に集まるようになった。

最初に調査対象の大筋を決めたが、1985年に出版された名覧では、戦後の作家までを含んでいたが、発行当時に比べ膨大な作家数になることが予想されるため、今回は1904年の山本鼎の自刻木版《漁夫》に始まる「創作版画運動」に参加した作家を中心に、1900年頃から1945年の間に版画制作にかかわった作家、出版者などに限定して調査を進めることとした。

手始めに、私の手元にあった展覧会図録、個人画集、

版画堂や山田書店などの目録類から作家名を採録し、1作家1ファイルを原則に関連資料を整理する作業を行い、続いて公的機関の所蔵している展覧会出品目録や『みづゑ』『中央美術』『アトリエ』などの美術雑誌に調査対象を広げていった。

2008年春になって、『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年1月）をまとめられた加治幸子さんにも参加を促し、4人で勉強会を行ったが、この大著から多くの作家名を採録したことは言うまでもない。その後、秋に石橋さんが結婚のため勉強会を抜けられたが、私が異動のために東京を去る2012年3月末までこの会を続けた。

今回はこの勉強会の報告であるが、収録を予定している作家数及び関係者は3000名を超す。その多くはアマチュアであり、活動の時期も一時期に限られるが、日本の近代版画を支えた作家たちの痕跡をできる限り記録したいとの思いから、現時点で作品やその活動が確認できる者は残らず収録した。また、版元、出版関係者などについても、最後にまとめて報告することとした。

なお、収録予定の作家の中には、「新版〔板〕画」関連の作家も多数含まれている。この伝統木版の作家たちについては、その分野について数多くの研究成果のある岩切信一郎氏が適任と思われ執筆をお願いした。また、孔版画家については近年研究を進められている和歌山県立近代美術館の植野比佐見学芸員に、大正期の新興美術に関する作家については町田市立国際版画美術館の滝沢恭司学芸員に執筆をお願いしたが、作家によっては今後も新たな研究者の参加を求めたいと考えている。

最後に、記述の不備な点や作家の遺漏など多々あると思うが、ご指摘をいただければ幸いである。

2013年10月 三木哲夫

〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆者補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、頻出する参考文献については以下のように表記する。
 - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
 - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者
岩切信一郎（新渡戸文化短期大学教授） 植野比佐見（和歌山県立近代美術館学芸員）
加治幸子（元東京都美術館図書室司書） 滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員）
三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長） 樋口良一（版画堂店主）

※本名覧制作にあたって、貴重な資料群の提供を頂いた山田書店に深く御礼を申し上げます。

戦前に版画を制作した作家たち（1）

相生垣秋津（あいおいがき・しゅうしん） 1896～1967

1896（明治29）年兵庫県高砂に生まれる。本名、三次。生家は履物製造販売業を営んでいた。川端画学校に学び川合玉堂に師事、巽画会の研究会のメンバーでもあった。1920年、国画創作協会第3回展に入選、この年未来派美術協会第1回展にも出品した。1921年、同協会出品者であった後藤忠光が編集発行した版画と詩の雑誌『青美』に詩を寄せた。この年赤人社第1回展に出品、翌年には「第一作家同盟」の結成に加わった。関東大震災を機に郷里の高砂に帰って父の仕事を継ぐ一方、俳句に専念し『ホトトギス』の同人となった。昭和期には俳句と絵による句画集を発行。版画の仕事として、版画誌『飛白』第1巻第4・5・6号（1936.8）に寄せた単色木版画《桐の実》が確認できる。また、『飛白』第1巻3号の「紹介・批評」欄に、10葉の版画をおさめた私家版の作品集を刊行したことが記されている。1967（昭和42）年逝去。【文献】『国画創作協会の全貌』（光村推古書院 1996）／『大正期新興美術資料集成』（国書刊行会 2006）（滝沢）

会澤 尚（あいざわ・ひさし）

1937年11月に東京の日本橋城東小学校で開催された教師対象の木版画講習会（講師：平塚運一）に参加。その記念版画集『日本橋版画』創刊号（1937.12）に《無題》を発表するが、第2号（1938.1）には目次に掲載されるだけで版画の添付なし。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

相田一郎（あいだ・いちろう）

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）在学中に、生徒が発行した版画誌『刀』に参加。第2輯（1928）に《無題》、第3輯（1928）に《栄光》、第4輯（1929）に《花》を発表する。1929年同校を卒業。【文献】『版画をつづる夢』展図録（宇都宮美術館 2000）／『創作版画誌の系譜』（加治）

相田五郎（あいだ・ごろう）

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）在学中、生徒が発行した版画誌『刀』に参加。第11輯（1931）に《バラ》、第12輯（1931）に《顕微鏡》、第13輯（1932）に《ミクロスコップ》を発表する。1936年同校を卒業。【文献】『版画をつづる夢』展図録（宇都宮美術館 2000）／『創作版画誌の系譜』（加治）

相田十郎（あいだ・じゅうろう）

神奈川県に生まれる。東京高等工芸学校（現・千葉大学工学部）在学中、印刷工芸科の刀画会同人誌『刀画』に参加。第2号（1935.10）に《無題》を発表する。1937年同校を卒業。丸星商店化学部に勤務。【文献】『東京高等工芸学校一覽』昭和14年版（東京高等工芸学校 1940）／『創作版画誌の系譜』（加治）

青木廣治（あおき・こうじ）

1929年10月に静岡で開かれた童土社同人第1回創作版画展に《夜の河》《ちんちん》《農家の入口》《風呂》《風景》の5点を出品。【文献】「童土社同人第一回創作版画展覧会出品目録」（三木）

青木 繁（あおき・しげる） 1882～1911

1882（明治15）年福岡県久留米に生まれる。1900年東京美術学校西洋科選科に入学。1903年《黄泉比良坂》で第1回白馬会賞。1904年同校卒業。1907年7月《わだつみのいるこの宮》で東京府勸業博覧会三等賞を受賞。同年8月父廉吾の死去以降は九州を放浪。1911（明治44）年3月25日（戸籍上では24日）福岡市で逝去。版画は、原画を山本鼎が木口木版彫刻した蒲原有明『春鳥集』挿絵《鑪斧》（本郷書院 1905）、『中学世界』第10巻第13号に色鉛筆原画を石版にした口絵《夕暮れ》（1907）、人物の頭部を描いた銅版《肖像》（1907年作とされるが未確認。1912年3月『ザムボア』第2巻第3号表紙絵に使用）などがある。【文献】『日本の版画I』（千葉市美術館 1997）／河北倫明『青木繁』（日本経済新聞社 1972）／『没後100年 青木繁展』（石橋美術館・ブリジストン美術館 2011）（樋口）

青木志満六（あおき・しまろく） 1888～1956

1888（明治21）年11月7日群馬県桐生に生まれる。本名、島六。一時東京美術学校西洋画科の予科に在籍。東京の大手呉服店（三越か）に勤め、友禅の図案を描く。1921年頃にリュウマチのため仕事を断念し、妻の故郷の若松市（現・会津若松市）に移る。同地の漆器組合で、事務員として働きながら、図案を描く仕事もしていた。1924年には地元の美術団体が主催する公募展・紅樹社第3回展に洋画を出品した他、大正末から昭和初期にかけて同地の黙歩会・彩光会などの美術団体に所属。1930年には「会津創作版画協会」の結成にも参加している。1956（昭和31）年1月14日会津若松市で逝去。【文献】村山鎮雄『福島近代美術』（三好企画 1992）／田中みなみ「会津若松の図案家・青木志満六とその活動」『相模女子大学紀要』71 A（2008）／田中みなみ「図案家・青木志満六の足跡」『相模女子大学紀要』72 A（2009）（三木）

青木四郎（あおき・しろう） 1910～？

1910（明治43）年静岡県に生まれる。小川龍彦、浦田儀一の学友。栗山茂の家に寄寓していた頃、栗山茂を小川龍彦らに紹介し、栗山茂周辺の杉山正義や内田達次、外川春子らと童土社創立に参加。静岡創作版画草分けの一人。後に油彩画に転じる。映画の看板や石版の版下を描いていたともいわれるが、その後の消息は不明。【文献】『静岡の創作版画』（静岡県立美術館 1991）／『版画家名覧』（山田書店版画部 1985）（樋口）

青木新作（あおき・しんさく）

1920・21年の日本創作版画協会の第2・3回展（目録記載の住所は東京）と1928・29年の第8・9回展に木版画を出品。作品名は、第2回展《雪降る夜》、3回展《夏の昼》《観覧席の一隅》《道》、第8回展《冬日小景》、9回展《上野冬景》《端のある風景》。なお、第11・14回帝展（1930・1933）などに油彩画を出品している「青木新作」（当時、静岡県在住）との関係は不明。【文献】三木哲夫「[資料]日本創作版画協会資料総出品目録」『和歌山県立近代美術館紀要』2（1997）（三木）

青木宣治（あおき・せんじ）

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）3年在学中、生徒が発行した版画集『刀 再版』に参加。その第4号（1941）に《室内》、第5号（1941）に《水車》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

青木富男（あおき・とみお）

長野県須坂で発行された版画誌『櫟』第1輯（1933.8）に《犬》、第2輯（1934）に賀状、第3輯（1934.7）に《静物》を発表する。当時、長野県上高井郡仁礼小学校に勤務。【文献】『須坂版画美術館収蔵品目録2 版画同人誌「櫟」「臥竜山風景版画集』』（1999）/『創作版画誌の系譜』（加治）

青木正年（あおき・まさとし）

長野県東筑摩郡川手に生まれる。長野師範学校2部2年に在学中、学生が発行した版画誌『樹氷』第1号2598年版（1938）に《筍》を発表する。1939年同校を卒業。1950年当時南安曇郡温明中学校に勤務。【文献】『卒業生名簿 昭和25年』（信州大学教育学部本校 1950）（加治）

青木元信（あおき・もとのぶ）

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）在学中に、生徒が発行した版画誌『刀』に参加。第8輯（1930）に《風景》、第9輯（1930）に《百日草》、第10輯（1931）に《風景》、第11輯（1931）《大仏》、第12輯（1931）に《甲板》、第13輯（1932）に《羊飼》を発表する。【文献】『版画をつづる夢』展図録（宇都宮美術館 2000）/『創作版画誌の系譜』（加治）

青田 浩（あおた・ひろし）

愛知県岡崎で発行された版画誌『試作』第2巻2号（1926.5）に《働く人》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

青柳菊雄（あおやぎ・きくお）

西田武雄の日本エッチング研究所主催第1回エッチング講習会（1933年8月1～3日開催）に参加。『エッチング』第10号（1933.8）にエッチング《工場》を発表する。当時、東京の新宿区立淀橋第三小学校に勤務。【文献】『エッチング』（加治）

青山英治（あおやま・えいじ）

静岡で発行された版画誌『かけた壺』第16号（1932.2）に《男》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

青山正治（あおやま・まさじ） 1893～1969

1893（明治26）年埼玉県に生まれる。東京美術学校（？～1925.11）、帝室博物館（？～1936）に勤務するかたわら木版画を研究し、1928年の第9回帝展に木版画《甞生》、1929年の第9回日本創作版画協会展に木版画《河口》を出品。博物館退職後は版画制作に専念した。1969（昭和44）年逝去。【文献】『近代日本版画大系 第3巻』（毎日新聞社 1976）（三木）

赤井恒茂（あかい・つねしげ）

稲野年恒門人で大阪で活躍。木版口絵を手掛ける。樋口隆文館からの『其後の金忠輔』（神田伯龍 1911）、『女が獅子』（渡辺黙禪 1912）、『迷ひ子』（伊原青々園 1912）等ある。川上姓を使用した時期があって落款印にみる。【文献】山田奈々子『木版口絵総覧』（文生書院 2005）（岩切）

赤池 悟（あかいけ・さとる）

大分で発行された版画誌『木版』第1号（1928.3）に《曙光さすアトリエ》、第2号（1929.12）に《道行く馬》、第3号（1930.4）に《海辺巖》、第4号（1930.10）に《海

辺》を発表。当時、徳島県阿波中学校教諭（『木版』第3号1930.4）【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1（2002）/『創作版画誌の系譜』（加治）

赤池徳平（あかいけ・とくへい）

1937年11月に東京の日本橋城東小学校で開催された教師対象の木版画講習会（講師：平塚運一）に参加。その記念版画集『日本橋版画』創刊号（1937.12）に《風景》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

赤石明輝（あかいし・あきてる）

1929（昭和4）年の白日会第6回展に木版画《品川の夕》、翌1930年の第5回国画会展に木版画《砂浴びする軍鴉》を出品。【文献】『白日会展絵出品目録（第1回～第59回）』（白日会 1984年）/「第五回國展目録」（三木）

赤城如矣（あかぎ・によい）

西田武雄発行の『エッチング』第46号（1936.8）にエッチング講習会作品《〔裸婦〕》を発表。【文献】『エッチング』（加治）

赤木 眞（あかぎ・しん）

『婦人グラフ』第3巻第7号（1926.7）に木版挿絵《厨房のひま》《カット》制作など、1924年～27年頃の『婦人グラフ』（国際情報社発行）に伝統木版による表紙や本文貼付の木版画、挿絵などの版下絵を描く。生没年など履歴の詳細は不明。（岩切）

赤木 実（あかぎ・みのる）

1931年11月の第4回プロレタリア美術大展覧会に版画《ハリスト》《労農団結せよ》《バリケードを距てて》《二人のオルグ》《吹雪をついて》の5点を出品する。【文献】岡本唐貴・松山文雄『日本プロレタリア美術史』（造形社 1967）（三木）

赤城泰舒（あかぎ・やすのぶ） 1889～1955

1889（明治22）年6月30日静岡県長泉村に生まれる。沼津中学を病気で中退。葉山に転地療養中水彩画に親しむ。1906年大下藤次郎の内弟子となり、水彩講習所と太平洋画会研究所に学ぶ。1909年文展に水彩画で初入選、以降官展や光風会展、二科展等に出品。1911年大下藤次郎死去に会い、『みづゑ』編集を引き継ぐ。1918年光風会会員。1921年文化学院創立に際し絵画科教師に招かれる。1927年木版《自画像》制作、1934年3月には西田武雄を招いて文化学院女学部でエッチング講習会を開催するなど版画への関心も強く、小泉癸巳男摺による木版《満五十歳記念木版画》（1939）や大判の《文化学院校庭》、《信州上高地》《四国松山城》など風景版画の他、読書する人物を描いた石版《試作》（織田一磨室画刷）、エッチング《普陀山》《少女の顔》《舟山列頭スケッチ》などが知られる。1941年文化学院を退職。1942年からは女子美術学校講師として水彩画の普及や美術教育に尽力する。1955（昭和30）年1月31日逝去。【文献】『版画』（版画社 1922.1）/『みづゑ』271（1927.9）/『エッチング』17・19・64・86・101・123・128 /『赤城泰舒遺作集』（美術出版社 1956）/『静岡ゆかりの画家たち』（静岡県立美術館 2002）（樋口）

赤坂治郎（あかさか・じろう）

東京で仲間と発行した版画誌『きつゝき』第1号（1940.3）

に《環江ちゃん》《山谷堀》《松江姉さま》を発表。自身で編集した第2号(1940.7)には《[盲人]》《[藤娘]》《木場》のほか表紙絵、扉絵も担当。また同時期に朝鮮半島釜山で発行された版画誌『朱美之集』第2冊(1940.8)に《葦票(平凡洞)》を発表。以後第3冊(1940.12)に《築地風景》、第4冊(1941.9)に《木場》、第5冊(1942.8)に《顔》と終刊まで発表を続ける。当時、東京市深川区亀住町に在住。「赤坂次郎」の表記も有。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

赤沢鉦太郎(あかざわ・えつたろう)

神戸の版画の家で発行した『HANGA』第9・10輯合併号(1926.7)に《裸体》を、第12輯(1927.10)には《静物》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

赤田八千子(あかだ・はちこ)

西田武雄の日本エッチング研究所主催第1回エッチング講習会(1933年8月1日～3日開催)に参加し、『エッチング』第11号(1933.9)にその作品(題材:テーブルの上の花と果物)を発表する。講習会名簿には「赤田ハチ」とある。【文献】『エッチング』(加治)

赤塚忠一(あかつか・ちゅういち) 1887～?

1887(明治20)年に生まれる。洋画家。『関東大震災画帖』(金尾文淵堂 1923.10)に赤城泰舒、幡恒春、水島爾保布らと共に、主に房州方面の震災画10図を描く。また年代は不明だが、長野県赤穂村での絵画講習会に松村巽らと講師で参加したとの記録がある。戦前、親交のあった中沢弘光を描いた木版画が知られる。【文献】三井光溪『中沢弘光研究』(2006) / 『版画堂 [目録]』51 (2001.9) (樋口)

赤間一雄(あかま・かずお)

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)3年、4年に在学中、生徒による版画集『刀再版』に参加。その第1号[1940]に《玄関》、第2号(1940.10)に《鐘楼》、第3号(1941)に《白樺》、第4号(1941)に《腕の興三郎》、第5号(1941)に《ゴンドラ》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

赤松麟作(あかまつ・りんさく) 1878～1953

1878(明治11)年10月20日岡山県津山に生まれる。後に一家で大阪中之島に移住、久宝小学校に通い、友人に青木月斗、金尾種次郎等がいた。1894年に山内愚仙の内弟子。1900年東京美術学校西洋画科選科卒。1901年白馬会第6回展に《夜汽車》出品、代表作となる。1904年に大阪朝日新聞社入社。版画は『阪神名勝図絵』(彫・大倉半兵衛 摺・西村熊吉)のひとりとして「尼崎」、「住吉」、「神戸波止場」、「六甲山」、「名塩」、「中山」を担当。第一集は1917年5月に金尾文淵堂から出版。金尾種次郎は1947年1月に亡くなり、同年3月赤松の版画集『大阪三十六景』が金尾文淵堂より最後期の出版物として出版される。1953(昭和28)年11月24日逝去。【文献】『没後40年 近代大阪の洋画家 赤松麟作展』(大阪市立美術館 1993) / 『阪神名勝図絵』(芦屋市立美術博物館 2005) / 石塚純一『金尾文淵堂をめぐる人びと』(新宿書房 2005) (岩切)

安藝蜻一(あき・せいいち)

1933年～34年にかけて青森県黒石町において仲間と版画誌『はんが』、『版画精神』を発行する。『はんが』第2号(1933)に《踊》《キャストネット》、第3号(1933)に《橋》、『版画精神』第2号(1933.6)に《仮面の踊》《道化は唄ふ》

《アクロバット》の3点を発表。しかし、両誌とも創刊号未確認のため、その全貌については詳細不明。また同時期、東京で発行されていた料治熊太発行の『白と黒』第39号(1933.9)に《仮面の踊》、第40号(1933.10)に《鈴をつけた馬》、第42号(1933.12)に《蝶と女》、第43号(1934.1)に《道化》を、料治発行の『版芸術』第18・19・21号(1933.9・1933.10・1933.12)にも各1点を寄稿する。表現主義的な題材と色彩により対象物を独自の感覚で捉えた特異な作品群である。当時、青森県南津軽郡黒石町に在住。【文献】『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』(青森県立郷土館 2001) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

秋間健一(あきま・けんいち)

東京で発行されたプロレタリア美術系の版画誌『爆竹』第3号(1929)に《鉄橋の下》、第4号(1929.10)に《深川風景》、第5号(1930.1)に《冬近き構内》、第6号(1930.3)に《冬の葛飾風景》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

秋山いさ(あきやま・いさ)

講師西田武雄によるエッチング講習会(会場:北海道岩見沢高女 1935年8月17・18日)に参加し、『エッチング』第35号(1935.9)にエッチング作品(題名不詳)を寄稿する。講習会名簿には「秋山ヒサ」とあり。当時、北海道岩見沢高等女学校に勤務。【文献】『エッチング』(加治)

秋山喜久三(あきやま・きくぞう)

1928年～31年にかけて甲府で版画と文芸の研究雑誌『線SEN』を友人らと発行する。その全5号の編集を担当し、《盛夏遊童之図》《杜若のある静物》の作品のほか、感想文や版画についての小文なども発表。その中にはアポリネールの詩に添えられているラウル・デュッフィの絵を版画に起こすことなども行い、文学と美術の融合をはかっている。また料治熊太発行の『版芸術』第18号(1933.9)には《木彫人形》を、新版画集団の機関誌『新版画』第2号(1932.7)には《菖蒲》を寄稿している。編集には「菊造」、版画発表には「喜久三」を使用。当時、山梨県甲府市元三日町に在住。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

秋山武雄(あきやま・たけお)

1935年8月、平塚運一を講師に長崎市磨屋小学校において開催された「版画長崎の会」主催第2回創作木版画講習会(『版画長崎』第5輯 1935.8)や1937年7月に長崎市勝山小学校で行われた日本エッチング研究所夏期講習会(『エッチング』58・59号 1937.8・9)に参加。長崎で発行された版画誌『版画長崎』の第4輯(1934.11)では新同人として紹介され、第5輯(1935.8)に《海辺》を発表している。当時は、長崎瓊浦中学校の教諭を勤め、城山町北五條に在住。【文献】「磨屋小で講習会」(阿野露団『長崎を描いた画家たち 上』形文社 1988年 48-52頁) / 『エッチング』(加治)

芥川清巳(あくたがわ・きよみ) 1904～1989

1904(明治37)年北海道に生まれる。少年の頃、自身の文芸雑誌を印刷するためにはじめて謄写版にふれ、文学を志して19歳で上京後、弟の謄写印刷業を手伝ううちに、1926年12月頃から謄写印刷に携わる。1931年頃草間京平(佐川義高)と知り合い、簡易印刷器としての謄写版の表現技術の開発に努めた。日本謄写芸術院での技術指導に参加し、『ゴシック書体の製版と印刷』(1933)を刊行。ま

た絵画技法に優れ、『謄写研究』を通じて謄写版による版画制作を提唱した。1989(平成元)年逝去。【文献】黒水武夫編『後塵録』(日本謄写美術協会 1947)/『謄写研究』25(日本謄写芸術院 1933)/須永襄編『昭和堂月報の時代』(大日本印刷株式会社 ICC 本部 2000)(植野)

芥川諦一(あくたがわ・ていち)

1936年当時横浜在住で、横浜美術協会会員と思われる。『エッチング』第15号(1934.1)に櫓を描いた《横浜》と題する銅版賀状が掲載される。また第49号(1936.11)には、西田武雄エッチング研究所主催「横浜大岡小学校講習会」で、「横浜の芥川諦一氏に助手をお願いした」の記述がある。武井武雄主催『版交の会』第1回会員。【文献】『エッチング』/「第1回版交の会 昭和10年度目次」(1935.1)(樋口)

阿久津勝一(あくつ・かついち)

佐伯留守夫、岩田信義、安西七郎ら9人が参加して発行した版画集『我等の版画』(刊行年不明)に《図案》《花の匂ひ》《風景》を発表する。前記の佐伯ら3人は川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)に在学中、生徒によって発行された版画誌『刀』(1928~1932)に作品を発表している。(加治)

阿久津眞民(あくつ・まさたみ)

1937年11月に東京の日本橋城東小学校で開催された教師対象の木版画講習会(講師:平塚運一)に参加。その記念版画集『日本橋版画』創刊号(1937.12)に《K町風景》を、第2号(1938.1)に《踏切》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

浅井朝喜(あさい・ともよし)

1931年8月に大分市で開催された東京創作版画倶楽部(中島重太郎)主催、大分市教育委員会後援の創作版画講習会に参加。1934年8月大分県師範学校主催のエッチング講習会に参加。当時、大分市高等小学校勤務。【文献】『エッチング』22号 1934.8【文献】『郷土図画』第1巻第5号(大分県美育研究会 1931.10)/『エッチング』(樋口)

朝井 清(あさい・きよし) 1901~1968

1901(明治34)年1月6日広島県呉に生まれる。本名、清一。呉海軍工廠に工員として働きながら版画を独学。1929年に第9回日本創作版画協会展と第10回帝国美術展に木版画が入選。以後、日本版画協会展、大阪の新興美術展、東光会展などに出品。1931年には地元で「呉版画倶楽部」を創立し、講習会・展覧会を開くなど版画普及にも努めた。1938年日本版画協会会員。戦後は日本版画協会展の他、再び東光会展、日本美術展(日展)にも出品するようになり、1952年東光会会員。その後、1960年に日本版画協会を退会し、日本版画会の創立に参加。1968(昭和43)年7月11日岡山県津山市で逝去。【文献】『朝井清遺作展』図録(広島県立美術館 1969)/『朝井清版画集』(朝井清版画集刊行会 1972)(三木)

浅井紫明(あさい・しめい)

1936年創設の名古屋エッチング協会会員で、同年8月27日に西田武雄を迎えた名古屋での座談会では長船一雄と共に案内役を務める。【文献】『エッチング』47号 1936.9)また『エッチング』第48号(1936.10)には、愛知社展にエッチング作品が入選した喜びを綴った「秋のたより」を寄稿。【文献】『エッチング』(樋口)

浅井 忠(あさい・ちゅう) 1856~1907

1856(安政3)年6月21日佐倉藩士の子として江戸藩邸で生まれる。幼少から絵画に関心強く、1876年に国沢新九郎の画塾彰技堂に学ぶと共に、同年開校の工部美術学校に入り、フォンタネージから本格的な油絵を学ぶ。1989年の明治美術会創立に参加し《春畝》(第1回)、《収穫》(第2回)を発表。近代日本洋画を代表する優品を制作する。1898年東京美術学校教授。1900年から1902年にかけてフランスに留学。帰国後は京都高等工藝学校(現在の京都工芸繊維大学)教授として京都へ移り、聖護院洋画研究所を開く。木版・石版に精通し教科書をはじめ雑誌の挿絵、口絵、あるいは、新聞附録なども手掛けている。1907(明治40)年12月16日京都で逝去。【文献】『日本の版画 I』(千葉市美術館 1997)/『浅井忠と関西美術院展』(府中市美術館・京都市美術館 2006)(岩切)

朝賀元郎(廊)(あさか・まんじろう) 1885~1965

1885(明治18)年京都に生まれる。本名石田万次郎。後に朝賀家の養子となる。前川千帆の次兄で、家業の経師屋を手伝いながら、大正の頃から新聞などに挿絵を描く。版画は戦中頃に千帆の影響で始めたといわれが詳細は不明。「元郎」と号し、デフォルメによるユニークで素朴な人物画が特徴。1951年の京都版画協会創立同人で、1956年関西創作版画展に出品などするも、その後病により創作から遠ざかる。1965(昭和40)年3月逝去。【文献】『前川千帆名作展』(リッカー美術館 1977)/『京都の近代版画』(京都市美術館 1986)(樋口)

朝隈達郎(あさくま・たつろう)

1931年11月に開かれた第4回プロレタリア美術大展覧会に版画《釈放要求》を出品。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

朝倉力男(あさくら・りきお)

北海道北見北湧小学校の教員。1927年頃に、児童の木版画を羅紗紙に糊付した児童版画集『北国の兒』を発行。『アトリエ』第4巻第4号(アトリエ社 1927.4 151頁)に木版画《読書する少女》の図版掲載あり。(樋口)

浅田鹿重郎(あさだ・しかじゅうろう)

『ホトトギス』第14巻第1号に木版挿画《馬車屋さん》掲載。【文献】寺口淳治・井上芳子「大正初期の雑誌における版表現—『月映』誕生の背景を探って—」『大正期美術展覧会の研究』(東京文化財研究所 2005)(樋口)

麻田辨次(あさだ・べんじ) 1899~1984

1899(明治32)年12月14日京都府に生まれる。旧姓、中西。1977年から辨白と改名。1921年京都市立美術工芸学校絵画科卒業。京都市立絵画専門学校に進み、1931年同校研究科修了。絵専に入学した1921年の第3回帝展に日本画が初入選。以後も帝展、新文展、日展と出品し、1965年には日本芸術院賞を受賞するなど、官展系の日本画家として活躍。一方、版画も能くし、1928年の第7回国画創作協会展に木版画《百舌の雛》を出品。1929年には徳力富吉郎らと「京都創作版画協会」を結成し、京都版画界の一翼を担う。1930年の第11回帝展には日本画と版画の両方を出品。1931年『大衆版画』の創刊に参加。1932年日本版画協会会員になるも、本展への出品は第3・4回展(1933・35)にとどまった。戦後は1951年に徳力らと「京

都版画協会」を結成している。1984（昭和59）年10月29日京都市で逝去。【文献】『麻田辨自作品集』（麻田浩 1992.12）（三木）

浅田政雄（あさだ・まさお）

兵庫県で発行された西日本新版画創作普及協会の機関誌『西日本新版画』第2年1輯（1937.3）に《相撲》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

麻田好雄（あさだ・よしお）

1929年2月に開かれた京都創作版画会第1回展に木版画《古風時計図》を出品。【文献】『創作版画・古版画展覧会目録』（1929.2）（三木）

浅野一郎（あさの・いちろう） 1908～1950

1908（明治41）年に生まれる。東京美術学校に学ぶ。プロレタリア芸術家のグループでプリンターを勤めたことが謄写版に関わるきっかけであったといい、1937年から昭和謄写堂美術部の製版を手がけ、名手として知られるようになった。執筆、製版ともに浅野の手になる『昭和謄写堂技術叢書第1篇 謄写印刷初等教本 製版篇』は、およそ20年にわたって版を重ねた。1950（昭和25）年逝去。1942年の創元会第2回展に《後楽園風景》で初入選し、1951年には準会員として遺作が展示されたが、出品作は謄写版による版画ではなく油彩画であった。【文献】須永襄編『昭和堂月報の時代』（大日本印刷株式会社 I C C 本部 2000）/辻善司編『ショーワ60年史』（株式会社ショーワ 1988年）/『昭和堂月報』/『集団Z派「カットブック」1 労組編』（芸術と技術研究室 1948）/『創元会目録集』（社団法人創元会 2001）/『創元会60年史』（社団法人創元会 2001）（植野）

浅野竹二（あさの・たけじ） 1900～1999

1900（明治33）年10月24日京都市に生まれる。京都市立美術工芸学校で日本画を学び、1919年同校絵画科卒業。1921年頃から油絵も独習する。1923年京都市立絵画専門学校本科卒業。1924年から26年にかけて札幌や滋賀の高等女学校で図画教員として勤務。退職後は日本画に専念し、1927年の第6回国画創作協会展に入選。会友に推挙され、翌年の7回展も出品。この頃から版画に転じ、1929年に絵専同級生の徳力富吉郎と「京都創作版画協会」を結成。1931年からは伝統的な木版技法による「名所絵版画」を発表した。1935年の第10回国画会展に版画が入選するも、翌年治安維持法違反で検挙される。1940年頃から制作を再開。戦後も名所絵を続ける一方、1950年頃から「自由版画」と称する大胆なフォルムと色彩を駆使した独自の作品を制作。その発表は主に個展であったが、1955年に平塚運一のすすめで日本版画協会に出品し、会友（1959退会）となった他、京都で結成された「京都版画協会」（1951）、「京都版画家集団」（1964）にも参加した。1981年京都市文化功労者賞受賞。1999（平成11）年2月10日京都市で逝去。【文献】『浅野竹二グワッシュ作品集』（浅野竹二グワッシュ作品集刊行会 1993）/『浅野竹二自撰木版画集』（京都書院 1981）/『浅野竹二遺作展』（京都精華大学 2000）（三木）

浅野秀一（あさの・ひでいち） 1887～？

1897（明治30）年7月21日新潟県三条町三ノ町に生まれる（「実際は5月21日」と本人が記載）。幼名は藤吉であったが、秀一と改名。1915年に中学を卒業し、東京美

術学校に入るまで母校の教師を務める。1922年東京美術学校図画師範科を卒業し、2年間広島県立三次高等女学校の教職につく。1924年に上京。教師として東京の京橋泰明小学校に勤務する一方、燦木社、東臺邦画会に所属し、日本画を発表する。図画教育方面においては東京美術学校内の錦巷会美術教育研究所の幹事を引き受け、図画教育協会を主宰。当時、『最新図案指導の理論と其の実際』（三成社 1921）など図画教育に関する著作を上梓。版画作品については、西田武雄発行の『エッチング』第6号（1933.4）にエッチング作品を発表し、第5号（1933.3）には「エッチングと図画教育」を寄稿。さらに同文の要旨は第11号（1933.9）、第14号（1933.12）にも掲載されている。当時、東京市外西巢鴨町に在住。没年不明。【文献】浅野秀一『毛筆による日本図画』（三成社書店 1932）/【文献】『エッチング』（加治）

浅野孟府（あさの・もうふ） 1900～1984

1900（明治33）年1月4日東京に生まれる。本名、猛夫。東京美術学校彫刻科中退。以後主に彫刻を中心に創作活動を行った。1918年、院展彫刻部に入選。1921年、岡本唐貴とともに彫刻家の戸田海笛のもとで学んだ。この年戸田とともに未来派美術協会会員に推挙され、協会第2回展に出品。1922年、二科展に入選、また神原泰、中川紀元ら同展への急進的作品出品者たちと「アクション」を結成し、翌年第1回展、1924年第2回展に出品した。関東大震災後は神戸に移り住み、岡本らと「DVL」を結成し、創作・発表活動の拠点とした。関西ではほかに、関西学院の学生らが中心となって発行した詩誌『横顔』（1924年11月創刊）に、岡本とともに同人として名をつらね、第1、2、4、6号の表紙を幾何学的構成の木版画で飾り、第3号には表現主的作風の木版画を提供した。また写真家の淵上白陽発行の美術雑誌、『造型』（1925年4月）を編集している。1924年、「三科」の結成に加わり、翌25年の三科会員展（第1回展）、三科公募展（第2回展）に出品した。同年、三科解散後に「造型」の結成に加わった。1927年にはこのグループを再編して「造型美術家協会」と改め、プロレタリア美術運動に突き進んだ。1929年、プロレタリア美術家同盟結成に参加。1930年には、大阪で新興人形劇団「トンボ座」を結成している。1945年、二科会の再建に会員として加わった。1984（昭和59）年4月16日逝去。【文献】『浅野孟府彫刻作品集』（東宝画廊 1986）/大正期新興美術資料集成（国書刊行会 2006）（滝沢）

旭 正秀（あさひ・まさひで） 1900～1956

1900（明治33）年5月6日愛媛県今治に生まれ、数ヶ月で京都府に移る。1936年より号・泰宏。1918年京都府立第二中学校を卒業。上京し、川端画学校で洋画を学ぶ。1919年東京朝日新聞社に入社（1930まで）。1920年日本創作版画協会第2回展に初入選。以後、1925年の9回展まで毎回出品。1921年小泉癸巳男と『版画』を創刊（翌年『詩と版画』と改題。1925年の13輯で休刊）。1922年日本創作版画協会会員。1926年素描社（のちのデッサン社）を設立。版画と素描の展覧会を開催し、その普及に尽くす。1930～32年渡欧。1931年日本版画協会の創立会員となり、1940年の9回展まで毎回出品。日本版画協会が1933年にパリで、1936年にサンフランシスコなど欧米9都市で開催した現代日本版画展の派遣委員として、作品に同行、その開催・運営に尽力した。また、1937年には新文展の無鑑査となり、37年から39年、42年にも出品。1940年には「新版画会」を創立した。戦前の主な著書に『創作版画の作り方』（弘文

社 1927)、『版画の手ほどき』(博文館 1930)、『版画實習読本』(内外社 1932)、『日本の版画』(大雅堂 1943)などがある。戦後も日本版画協会に属し、1948年白木屋、1951年資生堂で個展を開催している。1956(昭和31)年11月24日東京で逝去。【文献】〔自筆略歴〕(東京文化財研究所蔵) / 『日本美術年鑑』1957年版(東京国立文化財研究所 1958) (三木)

旭谷 左右 (あさひだに・そう) 1894 ~ 1938

1894(明治27)年京都市に生まれる。1913年京都市立絵画専門学校入学。1918年洋画を志し鹿子木孟郎画塾に学ぶ。1920年帝展初入選。1925年11月渡欧、1926年帰国。1930年頃からポッチチェリー、デューラー、ギリシャ古典美術などの影響を受けた装飾的模様の自刻木版画を制作する。僅か16、7点程だが、絹地に油絵具で木版刷を試みた。1938(昭和13)年逝去。1941年、旭正秀のデッサン社主催による旭谷左右遺作展が大坂三越で開催された。【文献】『旭谷左右遺作自刻木版に就いて』『デッサン社リーフレット 第巻号』(1941) / 『洋画家の夢・留学』展(星野画廊 1993) / 嘉治隆一『人物万華鏡』(朝日新聞社 1967 136 ~ 138頁) (樋口)

朝日奈 実 (あさひな・みのる)

静岡に在住の栗山茂は中学校卒業記念に同級生や近所の幼馴染と共に文芸と版画の同人誌『艸笛』を発行。その第3号(1930.8)に『フミキリ』《大宮風景》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

浅見香城 (あさみ・こうじょう) 1890 ~ 1974

1890(明治23)年姫路に生まれる。香城と号す。主に名古屋で活動した画家と推定。1930年~1932年にかけて出版の多色摺伝承木版画《新板 名古屋名所図絵》、大版12景12枚《金城黎明》《大須夏夜》《花園町燈灯景》《鶴舞薫風》他などが知られる。版元マークに「静」(詳細未詳)の空押し印、刷りは宮崎和三郎(1879~1937)『版画芸術』135)と推定。1974(昭和49)年逝去。【文献】『版画堂』(目録)』74(2007.12) (岩切)

浅見仁平 (あさみ・じんべい)

青森で発行された青森創作版画研究会の版画誌『陸奥駒』第16集(1934.12)に年賀状が掲載される。当時、青森県七尾町に在住。【文献】『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』(青森県立郷土館 2001) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

芦田青二 (あしだ・せいじ)

網干利根が中心となって台湾で発行した版画誌『阿をきび』の第1巻3号(1932.10)に『月』《阿武兎崎》《三保ヶ関》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

芦田泰淳 (あしだ・たいじゅん)

1936年8月、西田武雄を講師に関西小国民社において開催された京都エッチング協会主催の京都講習会(『エッチング』47号1936.9)に参加。翌年『エッチング』第60号(1937.10)にエッチング《松》を発表する。京都エッチング協会会員(1936年9月10日現在)。【文献】『エッチング』(加治)

東 一雄 (あずま・かずお) 1910 ~ 2000

1910(明治43)年8月14日富山県に生まれる。1930

年富山県師範学校卒業。小学校に勤めるかたわら、1935年文部省教員検定試験(西洋画用器画科)に合格し、翌年から1986年まで県下の旧制中学校・県立高等学校・短期大学で美術や幼児教育を教えた。一方で、富山の戦後の美術界の中核となった富山県美術展覧会(1946)、富山県洋画連盟(1949)、富山市美術展覧会(1951)などの創立・運営にも尽力している。版画に関連する記録としては、1938年8月に富山中学校で開かれた西田武雄(エッチング)、小野忠重(木版画)らによる版画講習会の参加者名簿(『エッチング』71号)に名を連ねているのが最初であるが、この講習会をきっかけに小野忠重と交友するようになり、翌39年の造型版画協会第3回展で協会賞を受賞し、会員となり、1942年まで出品。戦後も同展(1950・1951)の他、日本美術展覧会(1948~1957)、旺玄社展(1949~1957)などに木版画を発表した。その後、1960年代後半からは再び油彩画も発表するようになり、亜細亜現代美術展(1973、1976~1981)などに出品している。2000(平成12)年逝去。【文献】『東一雄自伝 カラスの学校』(楓工房 1998) / 『東一雄回顧展』図録(富山県民会館美術館 1998) (三木)

東 俊雄 (あずま・としお)

1939年8月、武藤完一が講師の宮崎県エッチング講習会に参加。当時、東白杵郡北川校の教員と思われる。(『エッチング』82号 1939.8)【文献】『エッチング』(樋口)

畦地梅太郎 (あぜち・うめたろう) 1902 ~ 1999

1902(明治35)年12月28日愛媛県に生まれる。1915年地元の二名尋常小学校を卒業。1918年郷里を離れ、中国航路の船員勤務をした後、1920年上京。新聞社などで働きながら、画家になることを決意(1922頃)するも、1923年の関東大震災に遭い帰郷。1925年再度上京。1926年内閣印刷局活版課に入り、仕事の合間を利用して、鉛板を使った版画を試みる。同年平塚運一を知り、指導を受ける。1927年日本創作版画協会第7回展に鉛版の《宇和島郊外風景(一)》など3点が初入選。恩地孝四郎や前川千帆を知り、後に摺りなどを手伝う。同年内閣印刷局を辞し、このことをきっかけに鉛版から木版に技法を転じる。1928年第6回春陽会展、第7回国画会展に入選するも、平塚運一にたしなめられ、翌年からは国画会展のみに出品。1930年第11回帝展に入選。1932年日本版画協会会員。1937年頃から「山」をテーマとした作品を描くようになる。1941年第4回文展に入選。1944年国画会会員(1971まで)。戦後は、再び国画会展・日本版画協会展を中心に作品を発表。1952年頃から代表的連作となる「山男」のシリーズを始め、1953年の第2回サンパウロ・ビエンナーレ、1956年の第4回ルガノ国際版画ビエンナーレ、1957年の第1回東京版画ビエンナーレ展などの国際展にも出品。その後、1966年の日本版画協会展・国画会展の出品を最後に、公募展への出品をやめる。1976年日本版画協会名誉会員。山の紀行文も多数執筆。1999(平成11)年4月13日東京都町田市で逝去。【文献】『画文集 とぼとぼ六十年』(講談社 1985) / 『畦地梅太郎全版画集』(町田市立国際版画美術館・南海放送畦地梅太郎記念美術館 1991) / 『生誕百年記念 畦地梅太郎展 山のよるこび』(町田市立国際版画美術館 2001) (三木)

安達吟光 (あだち・ぎんこう)

生没年未詳。1870(明治3)年頃から1900(明治33)年頃までが活動期間か。安達氏、名は平七、号は松雪斎、真匠、

松斎など使用。当初は「銀光」(松雪斎・真匠)、後の大中期は「吟光」を使用。明治浮世絵の他に、小説挿絵、多色摺木版の口絵も担当。どんなものにも対応できる器用さがある。植栽・栽培等にも精通していた。【文献】『原色浮世絵大百科事典 第2巻』(大修館書店 1982) (岩切)

足立源一郎(あだち・げんいちろう) 1889～1973

1889(明治22)年7月8日大阪市に生まれる。1904年第一高等小学校卒業。絵具屋奉公を経て1905年京都市美術工芸学校入学。1906年より関西美術院で浅井忠、鹿子木孟郎らの指導を受け、1908年太平洋画会研究所に学ぶ。1914年渡欧。1918年ロンドンで第一次松方コレクションの収集に携わり帰国。その後たびたび渡欧。1919年日本美術院同人。1920年春陽会創立会員。1936年日本山岳画協会創立会員。山岳風景画家として知られる。版画は1933年頃に《日本風景版画 第一輯 上高地之部》(発行者・中島重太郎 発行所・日本風景版画会)刊行の記録は残るが、実際に刊行されたかは未確認。1973(昭和48)年6月28日鎌倉市にて逝去。【文献】中島重太郎発行『日本風景版画第二輯 札幌之部 前田政雄作』奥付(1933.4) / 『足立源一郎展』(長野県信濃美術館 2001) / 『画家足立源一郎の記録』(三好企画 2002) (樋口)

安達 悟(あだち・さとる)

愛知県半田の教師仲間の版画団体・版刀会が発行した版画誌『運』第10号(1935)に《賀状》を発表する。当時、愛知県知多郡に在住。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

足立 隆(あだち・たかし)

1934年8月大分県師範学校主催エッチング講習会、1937年8月別府講習会に参加(『エッチング』22号 1934.8)。1936年大分エッチング協会会員。(『エッチング』47号 1936.9) 当時、別府市北小学校教員と思われる。(『エッチング』58号 1937.8)【文献】『エッチング』(樋口)

安達武利(あだち・たけとし)

1935年8月、九州版画協会主催版画講習会(講師:平塚運一、畦地梅太郎)に参加し、その時制作された作品《長湯風景》は『九州版画』第8号(1935.10)講習会記念号に掲載された。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

安達友治(あだち・ともはる) 1909～1973

1909(明治42)年新潟県に生まれる。もとより文芸に関心があり、また社会活動の手段とするため、尾崎忠義から、そして日本謄写芸術院の刊行物によって謄写技術を学んだ。1931年奈良市に開業、以後「新踏社」を営む。謄写印刷業の傍ら、古都奈良の風景をモチーフに、しばしば画家・長谷太郎の原画による孔版画をふたりの共同作業として制作、代表的なものに『長谷太郎画集1 大和路』(1967)がある。関西技術家クラブをはじめとするグループの活動に参加して技術者同士の交流を深め、のちに日本謄写印刷業連盟の奈良支部長及び日謄連理事を務めた。1973(昭和48)年逝去。【文献】黒水武夫編『後塵録』(日本謄写美術協会 1947) / 『グラフィックサービス』751(社団法人日本グラフィックサービス工業会) (植野)

足立曲夫(あだち・まげお)

飛騨高山で発行された版画誌『版系』創刊号(1938)に

《山小屋》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

足立 求(あだち・もとむ)

長野県下の教師の集まりであった下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』第3号(1936.7)に《賀状》が掲載される。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

足立良夫(あだち・よしお)

長野県下の教師中心の集まりであった下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』第3号(1936.7)に《賀状》が掲載される。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

渥美徹彌太(あつみ・てつやた)

1932(昭和7)年の第2回日本版画協会展に木版画《輪轉機のある工場》が初入選。以後、第3回～6回展(1933～1937)、第8・9回展(1939・1940)、第12回展(1943)に木版画各1点を出品。1944年3月会友に推挙されているが、その後の消息は不明。なお、出品時の住所は東京。【文献】『日本版画協会目録』『日本版画協会々報』37(1944.9)(三木)

穴山勝堂(あなやま・しょうどう) 1890～1971

1890(明治23)年2月3日山梨県東八代郡錦村に生まれる。本名、義平。1912年東京美術学校図画師範科卒業。松岡映丘に師事。1921年に新興大和絵会(岩田正巳・狩野光雅・遠藤教三らと)を結成。版画では1927年の『日本新名所図絵』(発行・新大和絵木版画刊行会、発売・日本木版芸術社)に《淡路(2月)》、《富士(9月)》、1928年7月発行の『(大和絵版画)日本八景』(彫・小倉四郎、摺・西村熊吉)に《室戸岬》を担当。1971(昭和46)年7月23日逝去。【文献】『20世紀物故 日本画家事典』(美術年鑑社 1998) (岩切)

阿部金剛(あべ・こんごう) 1900～1968

1900(明治33)年6月26日盛岡市に生まれる。父は東京府知事阿部浩。東京府立一中を経て、慶応義塾大学文学部予科中退。在学中から岡田三郎助に師事し、1926年渡仏。アカデミージュリアンに学び、1927年帰国。1929年東郷青児と油絵展を開催。同年二科展に超現実主義的作品が初入選。1930年に論考『シュールリアリズム絵画論』(天人社)、1931年『阿部金剛画集』(第一書房)を発行。1933年日本で最初の前衛美術を標榜したアヴァンギャルド洋画研究所を古賀春江、峯岸義一、東郷青児らと設立。1947年二科会会員。1968(昭和43)年11月20日東京で逝去。版画は1932年のエッチング《題名不詳》(12.1cm×18.2cm)が知られるのみ。【文献】『日本の版画 IV 1931～1940』(千葉市美術館 2004) / 『日本のシュールリアリズム 1925～1945』(名古屋市美術館 1990) (樋口)

阿部貞夫(あべ・さだお)

1925(大正14)年三科公募展に5点出品。翌26年横井弘三が組織した無鑑査自由出品の「理想大展覽会」に、「高等遊民・画家・詩人」という肩書で舞台装置、油彩画、詩稿を出品した。またこの年アナーキストらのグループ「野獸群」に加わり、有泉譲らと「野獸群美術号」として、版画誌『構成派』を編集・創刊。同誌に機械的な形象で構成した木版画《題のなき構成》を寄せた。

以下に、前衛美術家として活動した本人物と同一である可能性のある、版画家阿部貞夫について記載する。1910(明治43)年東京に生まれるが、生後すぐに陶芸画工の父のもとを離れ、北海道留萌の祖父のもとに移る。小学校卒業後

上京し、明治中学校に入学したとされるが、関東大震災後留萌に戻り留萌中学校に通う。1928年中学を卒業し上京、1930年本郷絵画研究所で学んだ。1935年頃から本格的に版画の制作を開始。戦後は一旦留萌に戻って製材所で働きながら版画を制作した。1953年に釧路に転居し、関野準一郎などの指導を受けて一層版画制作に力を入れた。1958年札幌に活動の拠点を移し、日本版画協会展、日版会展、新世紀美術協会展などに出品した。1969(昭和44)年7月8日逝去。【文献】『大正期新興美術資料集成』(国書刊行会2006) / 『阿部貞夫版画集』(阿部貞夫版画集出版委員会2010) (滝沢)

阿部治良(あべ・じろう) → 室 順治(むろ・じゅんじ)

阿部新一(あべ・しんいち)

北海道小樽中学校に1934年まで教員として在職。1935年からは北海道岩見沢高女に、1940年からは庁立札幌高等女学校に勤務する。教師の傍ら、《札幌植物園》などのエッチング作品を西田武雄の発行した『エッチング』の第20、22、40、70、75、80、94、107号(1934.6～1941.12)に発表。また、大分で発行された版画誌『九州版画』第19号(1939.6)にエッチング《町角》を発表する。日本エッチング作家協会準会員(1940年)。同会主催の第1回日本エッチング展覧会(『エッチング』96号1940.12)に《雪ノ森》を、以降1940年12月の第2回展(『エッチング』101号1941.6)に《風景》を、1942年7月の第3回展(『エッチング』114号1942.7)には《街はづれ》を出品する。この間の1935年と1938年には西田武雄を講師として教師や生徒を対象としたエッチング講座を岩見沢高女に於いて開催する。その概況を『エッチング』に「西田先生を迎えて」(第35号1935.9)及び「蝦夷講習記」(71号1938.9)として報告している。また、第38号(1935.12)には「エッチングを教えて」と題して教授する心境を綴り、エッチングの普及にも尽力した。当時、札幌市南四条西に在住。日本版画奉公会会員(1943年)。【文献】『エッチング』(加治)

安部冬蔵(あべ・とうぞう)

全国の教員仲間が寄稿した大分で発行された版画誌『木版』第1号(1928.3)に《裸婦》を発表。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

阿部敏夫(あべ・としお)

神奈川県に生まれる。東京高等工芸学校(現・千葉大学工学部)在学中に印刷工芸科刀画同人誌『刀画』に参加。第2号(1935.10)に《朝顔》を発表。【文献】『東京高等工芸学校一覧 昭和14年版』(東京高等工芸学校1940) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

阿部正晴(あべ・まさはる)

1932年5月の第3回京都工芸美術展に木版画《橋のある風景》、11月の第1回関西創作版画展(京都)に《木屋町》《夜店》(各木版)、1933年1月の京都創作版画会第3回展に《風景試作》《川原町の夜》《木屋町》(各木版)を出品。また同年5月に木村清太郎・長永治良・政田英三と創作版画雑誌『興版』を創刊し、《夜店》《池畔》《河》を発表。なお同誌は次号の予告があるも刊行の有無は不明。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12(1984) / 『興版』1(1933.5) (三木)

阿部良信(あべ・よしのぶ)

1937年8月の青森師範図画教室での今純三夏期図書講習会に参加。但し版画制作があったは不明。【文献】江渡益太郎『青森県版画教育覚え書』(津軽書房1979) (樋口)

網干利根(あばし・とね)

1931年の後半、台湾に渡り、1932年には斗六に移住する。それまでの住所は不明だが、当時門司に在住していた詩人・東潤が出版した詩集『阿片』(1931.1)、『彼氏』(1931.2)『上層建築』(1931.5)、『LE ETOILE』(1932.11)に文芸作品(詩)を寄稿する。版画は台湾移住後に始めたと思われる。当時、東京では料治熊太が『白と黒』(1930.2創刊)と『版芸術』(1932.4創刊)を発行していた。網干は『白と黒』の第13号(1931.4)～19号(1936.11)までと第21号(1932.2)に詩を寄稿している。この版画誌『白と黒』で木版画に出会い、1932年4月『版芸術』の創刊を契機に、版画を制作するようになったと思われる。『白と黒』第27号(1932.8)に初めて版画作品《胡弓と花》を、そして『版芸術』には第6号(1932.9)に《パイヤ樹下》を発表する。その後、『白と黒』では第27・28・30・33・35・45号(1932.8～1934.3)に、『版芸術』では第6・9・15・24号(1932.9～1934.3)に南国の果実や台湾風景を版画にして発表。その一方、当時住居のあった台湾斗六では網干が中心となり、版画と文芸の同人誌『阿をきび』を創刊する。現在確認できるものは第1巻3号(1932.10)のみであるが、そこには版画作品《蜜柰榴》《釈迦頭》《自画像》が発表されたのみで、詩の作品は掲載されていない。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

天上 純(あまがみ・じゅん)

1941年3月27日、高羽敏の尽力で西田武雄、武藤完一らを招いた大阪エッチャー小集(大阪・寿司恵)に参加したとの記録がある。なお、同小集参加者の中には「西村貞」の名前も見られる。【文献】武藤隼人『版画家・武藤完一資料集(戦前篇I)』(東京学芸大学大学院修士論文2010.2) (樋口)

鮎沢武男(あゆざわ・たけお) 1904～1990

1904(明治37)年栃木県河内郡(現・宇都宮市)に生まれる。1920年宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)を卒業。栃木県師範学校第2部に入学し、卒業後は小学校に勤務する。1929年に姿川尋常高等小学校に転勤し、同校の教師であった篠崎喜一郎らと知り合い、当時宇都宮中学校に赴任していた川上澄生と仲間が発行した版画誌『村の版画』に参加する。その第11輯(1930.7)に《習作(片馬車)》と裏表紙《悦》を発表するが、この号のみで、以後版画制作は行っていない。30代後半で教職を辞し、戦後は家業の旅館業を営む。1990(平成2)年逝去。【文献】『版画をつづる夢』展図録(宇都宮美術館2000) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

荒井岩三(あらい・いわぞう)

版木会発行の創作版画集『版』第5輯(1937.5)、第6輯(1937.6)、第7輯(1937.7)(表記は荒井岩蔵)、第10輯(1937.10)、第11輯(1937.12)に各1点の木版画を発表する。版木会は同誌に掲載されている校章や題材から愛知県知多郡師崎町(現・南知多町)の学校(当時・師崎町立師崎中学校)の版画同好会と考えられる。(加治)

荒井寛方(あらい・かんぼう) 1878～1945

1878(明治11)年8月15日、栃木県塩谷郡氏家町に

荒井藤吉の長男として生まれる。本名、寛十郎。父は滝和亭に学んだ上絵師。1899年に上京し水野年方に入門し「寛方」の雅号を受ける。1902年から国華社に入社し、仏画模写に約10年従事した。雑誌、単行本の小説の木版口絵も手掛ける。文展、日本美術院の画家として活躍。当初は歴史画、後には仏画の大家となる。1945（昭和20）年4月21日、旅先の郡山市で脳卒中にて急死（『日本美術年鑑』1944—46年版）。【文献】『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社 1995）（岩切）

荒井建次郎（あらい・けんじろう）

版本会発行の創作版画集『版』第2輯（1937.2）に《竹に寒雀》ほか1点の木版画を発表する。版本会は同誌に掲載されている校章や題材から愛知県知多郡師崎町（現・南知多町）の学校（当時・師崎町立師崎中学校）の版画同好会と考えられる。（加治）

荒井弘一（あらい・こういち）

版本会発行の創作版画集『版』第2輯（1937.2）に《竹に寒雀》ほか1点、そして第5輯（1937.5）、第6輯（1937.6）、第7輯（1937.7）、第10輯（1937.10）、第11輯（1937.12）に各1点の木版画を発表する。版本会は同誌に掲載されている校章や題材から愛知県知多郡師崎町（現・南知多町）の学校（当時・師崎町立師崎中学校）の版画同好会と考えられる。（加治）

荒井琴也（あらい・ことや）

版本会発行の創作版画集『版』第2輯（1937.2）に《竹に寒雀》ほか1点、そして第7輯（1937.7）に木版画1点を発表する。版本会は同誌に掲載されている校章や題材から愛知県知多郡師崎町（現・南知多町）の学校（当時・師崎町立師崎中学校）の版画同好会と考えられる。（加治）

荒井東留（あらい・とおる）→末木東留（すえき・とおる）

荒井とみ三（あらい・とみぞう）1902～1971

1902（明治35）年11月13日高松に生まれる。本名は富三郎、旧姓は龍池。漫画家、郷土史家として知られる。家業の竹輪製造を継ぐかたわら、宮尾しげをに師事する。郷土研究に力をいれ、絵と文で郷土高松の歴史、史跡、伝説などを地方新聞に寄稿し、『讃岐郷土研究』や『高松繁昌記』など多くの著作物を残した。型染版画の技法によりカレンダーなどを出版。『さと・よねじろう蔵書票春の集』（1936）に作品を発表する。1971（昭和46）年3月7日逝去。【文献】『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』（青森県立郷土館 2001）/『荒井とみ三』『20世紀日本人名事典 あーせ』（日外アソシエーツ 2004）（加治）

新井浩石（あらい・こうせき）

新作小唄『花園の恋』（山野楽器店 1919）、『草の葉っぱ』（山野楽器店 1922年改訂6版）の木版装丁画が知られる。【文献】『版画堂〔目録〕』89号（2010.10）（樋口）

新井芳宗・二代（あらい・よしむね）1863～1941

1863（文久3）年2月5日生まれ。名は周次郎。初名は年雪、1882年以降に（二代）芳宗を襲名。号は松斎、一松斎。13歳で月岡芳年入門、15歳で西南戦争錦絵を手掛ける。《撰雪六々談》（大判24枚・滑稽堂）、《芳宗随筆》（大判・12ヶ月12枚）等の明治錦絵類、あるいは小説挿絵、口絵も描く一方、縮緬本の版元として知られる長谷川（西

宮与作）より、夜景や美人などを描いて、外国人向け木版画の制作にもかかわったと思われるが、詳細は不明。1941（昭和16）年に79歳で逝去。【文献】大曲駒村「一松齋芳宗父子」（『浮世絵志』24・26 1930.12・1931.2）/『The new wave』（Hotei Japanese prints 1993）（岩切）

荒川太郎（あらかわ・たろう）1907～1999

1907（明治40）年生まれ。失職をきっかけに謄写版をはじめ、1934年に謄写印刷所を開業、小泉與吉から深い影響を受ける。戦時中は印刷業から離れるが、戦後、愛知県春日井市、のち名古屋市で、現在の株式会社荒川印刷の前身である荒川謄写堂を営む。戦後まもなく「絵画、美術に重点をおく、これまでの学校・会社関係のプリントから文化団体などの美術印刷に方向を変え、それによって、一般の謄写版に対する侮辱感を変えていきたい」と目標を述べており、若山八十氏の回想に、ユニークな外国語文献の出版者として、また漢詩の訳業を残した人として記されている。1999（平成11）年逝去。【文献】黒水武夫編『後塵録』（日本謄写美術協会 1947）/『孔版求道』（関西謄写印刷技術家倶楽部 1948）/田村紀雄、志村章子『ガリ版文化史』（新宿書房 1985）/荒川太郎訳著『梨花の苑』（私家本 1978）（植野）

荒川弥之助（あらかわ・やのすけ）

佐伯留守夫、岩田信義、安西七郎ら9人が参加して発行した版画集『我等の版画』（刊行年不明）に《郊外》を発表する。前記の佐伯ら3人は川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）に在学中、生徒によって発行された版画誌『刀』（1928～1932）に作品を発表している。（加治）

荒木芳男（あらき・よしお）

近代版画の出発点となった美術文学雑誌『平坦』第3号（1905.11）に《落葉》を発表するが、その後の版画制作は不明。日清戦争の芝居をみて病みつきになり、1907年に銀行員になった後も芝居の鑑賞を続け、1938年に『芝居スケッチ三十年』を上梓する。【文献】荒木芳男「思ひ出の記』『芝居スケッチ三十年』（河出書房 1938）/『創作版画誌の系譜』（加治）

嵐野（あらしの）

札幌で発行された詩・版画・芸術雑誌『さとぼろ』第3巻1号〔通巻11号〕（1926.7）に《無題》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

有泉 譲（ありいずみ・ゆずる）

1924年9月、東京の三田幼稚園で第1回個人展覧会を開催し、前衛と思われる作品を発表した。その後12月開催のマヴォ展に、構成物《黄色い機械の構成—カッシュ》を出品。1925年には9月開催の三科公募展に《旋律舞踏第一期》を出品、同じ時期に《旋律舞踊宣言》を發した。1926年、アナーキスト詩人らと文芸美術雑誌『野獸群』を創刊、編集同人となった。また、野獸群の美術号として版画誌『構成派』を編集・創刊した。同誌に黒い線による構成的な版画《吾々の工場への設計》を寄せた。またひきつづき、旋律舞踊発表会を開き、村山知義、岡田龍夫らにつづいて舞踊を演じることに力を注いでいる。1928年に日本美術学校を卒業したが、その後の消息は不明。【文献】『大正期新興美術資料集成』（国書刊行会 2006）（滝沢）

有賀 潔 (ありが・きよし)

1923年の第5回日本創作版画協会展に木版画《壺と林檎》を出品。出品時の住所は長野。なお、山本鼎が1919年に提唱した農民美術運動の初期参加者(木彫部訓練生)に有賀潔の名前がある。同一人であれば、上伊那郡高遠の生まれで、当時「上田新聞」の記者をしていたようである。【文献】『第5回日本創作版画協会展目録』/山本鼎「農民美術と私」『美術家の欠伸』(アルス 1921)/小崎軍司『夜明けの星 自由大学 自由画/農民美術を築いた人たち』(造形社 1975 305~307頁) (三木)

有賀平治 (ありが・へいじ)

1930年頃に開かれた京都創作版画会第2回展に木版画《百合》《二見浦》《牡丹》を出品。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12(1984) (三木)

有島生馬 (ありしま・いくま) 1882~1974

1882(明治15)年11月26日横浜に生まれる。本名、壬生馬。兄は有島武郎、弟は里見淳。1901年東京外国語学校イタリヤ語科卒。藤島武二に師事し、1904年~1907年渡欧。帰国後、『白樺』創刊同人。同誌に「画家ポール・セザンヌ」を連載。1913年処女小説『蝙蝠の如く』を出版、この頃より筆名を生馬とする。1914年二科会創立会員となるが、1935年退会し、帝国美術院会員、日本ペンクラブ副会長。1936年安井曾太郎らと一水会を結成。1964年文化功労者。後期印象派の紹介者として文芸に大きな影響を与えた。1974(昭和49)年9月15日逝去。版画は石版刷《白樺主催洋画展覧会ポスター》(1911)、『丹青』2巻第1号(1939.3)に銅版《ハノヴィン祭》、第一回日本エッチング展覧会(1940)に銅版《挿画》出品、『白樺』第1号第4巻(1910.7)に《白樺の湖》など木版挿画6種、与謝野晶子『さくら草』(東雲堂書店 1915)木版扉絵などがある。【文献】『エッチング』96/『日本の版画II 1911-1920』(千葉市美術館 1999) (樋口)

在田 綱 (ありた・しげし) 1887~1942

1887(明治20)年宮城県に生まれる。白馬会本郷研究所を経て、東京美術学校に学ぶ。風刺漫画雑誌『東京パック』の編集にかかわる。1923年に同誌刊行中絶にあたり、十数年勤務していた時事新報を辞し、同年7月14日から20日まで大阪丸善にて個展を開催。北沢楽天主宰の『時事漫画』で活躍。1928年『東京パック』再刊にあたっては、主宰者の一人として復帰。柳瀬正夢を中心に発足した「日本漫画家連盟」にも名を連ねる。版画は新作小唄『旅は遙かよ』木版装丁(山野楽器店 1919)、『層雲』第3巻第7号(層雲社 1913.10)に木版挿絵《無題》(右下にSAの版上イニシャル・サイン)、『層雲百号記念出版画集』(層雲社 1920)の木版挿画3図などがある。【文献】寺口淳治・井上芳子「大正期の雑誌における版表現—『月映』誕生の背景を探って—」『大正期美術展覧会の研究』(東京文化財研究所 2005)/『美術新論』第2巻第8号(1927.7)/『大正イマジユリィの世界』(松濤美術館 2010)/『版画堂』目録』89号(2010.10)/青木茂「新・旧刊案内55」『一寸』55(学藝書院 2013.8) (樋口)

有田四郎 (ありた・しろう) 1885~1946

1885(明治18)年7月7日東京・神田に生まれる。旧姓、下条。1903年東京美術学校西洋画志望予備科に入学。在学中の1907年に開かれた第1回文部省主催美術展覧会(文

展)に入選し、1909年同校西洋画科卒業。卒業後も同年の第3回文展、翌1910年と14年の第4・8回文展、1918年と19年の第3・4回光風会展などに入選。その間、和田英作らと1912年赤坂離宮の壁画、1917年横浜市開港記念館の壁画を制作している。その後、1923年に愛媛県へ、1925年には宮崎県へ移り、1927年から宮崎県立延岡中学校で、1935年から1942年までは宮崎県師範学校で美術教師として勤務。1939年には西田武雄のエッチング講習会を招聘し、自身も受講している。1940年日本エッチング作家協会の結成に参加。1941年11月の『九州版画』の会員名簿にも名を連ねている。1942年に東京へ戻り、同年の第3回日本エッチング作家協会に銅版画《子等の育つた家》《硫黄製錬所》を出品。その後、1944年に香川県豊島に移り、1946(昭和21)年3月22日逝去。【文献】『エッチング』82・96・112・114/『今純三・和次郎とエッチング作家協会』図録(渋谷区立松濤美術館 2001) (三木)

有村博之 (ありむら・ひろゆき) 1898~1964

1898(明治31)年鹿児島に生まれる。1926年から筆耕を、1918年に謄写版による印刷請負を始めた。これが、不特定多数の顧客を対象とする謄写印刷業のはじまりとされている。楷書に優れ、変わったところでは名刺大のスペースに極小文字で製版・印刷した百人一首は、謄写版の性能とその技術を知らしめるには格好な例として、繰り返し制作された。1930年に宮川良が開設した日本謄写芸術院での指導に携わり、戦前、戦後を通してさまざまな技術講習会で講師を勤めている。『昭和堂月報』誌上などに残した回想は、謄写版の歴史を知る人の証言として貴重である。1964(昭和39)年逝去。【文献】須永襄編『昭和堂月報の時代』(大日本印刷株式会社ICC本部、2000年)/辻善司編『ショーワ60年史』(株式会社ショーワ 1988)/『昭和堂月報』/『孔版技術』2(孔版技術研究所 1951)/『呼吸の垢 友野康夫随筆集』(私家本 1970) (植野)

有本隆良 (ありもと・たかよし)

玩具研究家として知られる。紀州郷土玩具研究会を賛助し、古型の保護、創生、複製に力を入れ、郷土玩具の普及や保護に尽力する。その中で料治熊太の発行した『版芸術』第50[51]号や『おもちゃ絵集』第5・6号(1936)に郷土玩具を題材とした版画を発表する。特に『版芸術』第50[51]号(1936.6)は特集号「有本隆良版画集紀州郷土玩具集」(版画20枚)として発行された。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

案西賛吾 (あんざい・さんご)

1929年の日本創作版画協会第9回展に木版画《炭山風景》を出品。【文献】『日本創作版画協会第九回展覧会目録』(三木)

安西七郎 (あんざい・しちろう) 1913~2006

1913(大正2)年栃木県河内郡姿川村(現・宇都宮市)に生まれる。1920年姿川尋常小学校に入学。1926年に宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)に入学。版画誌『村の版画』同人の岩上清三郎が同校の教師であったため、影響を受けて版画を始めたいと思われる。同校での英語教師川上澄生との出会いが更に版画への傾倒を深めていく。そして生徒らが発行していた版画誌『刀』に参加し、その第8輯(1930)に《静物》、第9輯(1930)に《夜の風景》、第10輯(1931)に《風景》を発表する。1931年には東京府豊島師範学校(現・筑波大学)に入学。1933年卒業後は教職に就き、版

画制作は中断する。戦後1968年に千葉県在住の版画家船崎光治郎の主宰する「版画を作る会」に参加し、版画制作を再開。10回の個展を開催し、『安西七郎喜寿記念版画集』（1993）を刊行する。また、宇都宮中学時代と考えられるが、版画誌『刀』の仲間であった佐伯留守夫や岩田信義らと版画集『我等の版画』（刊行年不明）を発行し、『古城』『ビルデング』『異邦人』を発表している。1959年には日本卓球協会理事に就任。2006（平成18）年逝去。【文献】『版画をつづる夢』展図録（宇都宮美術館 2000）／『創作版画誌の系譜』（加治）

安藤東一郎（あんどう・とういちろう）

西田武雄エッチング研究所製エッチングプレスを所有（『エッチング』51号 1937.1）。1943年日本版画奉公会会員となる。当時、杉並区高円寺在住（『エッチング』123号 1943.4）。【文献】『エッチング』（樋口）

安藤復蔵（あんどう・ふくぞう）

『みづゑ』127号の「新刊紹介」に、八咫屋から「木版絵葉書 安藤復蔵氏筆」とあって、第一輯に《やなぎ》《濱の松》、第二輯に《山路》《桃の花》が制作されることが判る。【文献】『みづゑ』127（1915.9）（岩切）

安納 弘（あんの・ひろし） 1918～？

1918（大正7）年宇都宮市小幡に生まれる。1930年宇都宮尋常小学校西校卒業し、宇都宮高等小学校に1年通うが、翌年宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）に入学する。当時、同校には川上澄生が英語教師として赴任していた。在学中は生徒が発行した版画誌『刀』に参加し、その第11輯（1931）に《花》、第12輯（1931）に《風景》、第13輯（1932）に《リンカーン》を発表。1936年に同校を卒業し、その後は終戦まで兵役に召集され、戦後は安納弘司法書士事務所を開設した。【文献】『版画をつづる夢』展図録（宇都宮美術館 2000）／『創作版画誌の系譜』（加治）

安保 暁（あんぼ・あきら）

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）4年、5年在学中、同校生徒による版画集『刀再版』に参加し、その第1号〔1940〕に《海》、第2号（1940.10）に《オランダ船》、第3号（1941）に《ボンペイの街》、第4号（1941）に《校舎》、第5号（1941）に《童話》を発表する。【文献】『創作版画の川上澄生』（鹿沼市立川上澄生美術館 2002）／『創作版画誌の系譜』（加治）